

## 図書館

細田あや子

昨年5月に帰国した。今、日本の大学に戻って一番なくてさみしいのはハイデルベルク大学の図書館である。旧市街の大通りは観光客で賑わっている一方、それと平行する裏の道路に面した建築物は、教会と向き合ってそびえていて、堂々たる外観を呈している。建物の大きさの割に、正面玄関は小さい。2・3段小さな階段を上がるとぶつかるのがドアの取っ手。銅製の重いドアは開けるのに力がいる。取っ手がわたしのちょうど目の高さにあって結構これをつかみ引張って開けるのが大変だが（自動ドアなんぞ皆無）、親切に開けてくれる紳士淑女が多く、中に入ればあの図書館独特の空気が流れている。ここは留学してすぐ行きつけの場所になった。有名なマネッセ・コーデクスという写本が展示されていて、それを大変ありがたそうに見ることができるし、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの*Scivias*もある。パソコンが置いてある検索室や、閲覧室、発行年順にびっしり並んだ本棚の書庫など、めいっばい活用してきた。

どの大学にも、大体必要なものがそろっているが、大学ごとに異なる専門科目について書籍をそろえる仕組みになっているようだ。ハイデルベルク大学では、エジプト学とパピルス古文書学と美術史をとくに充実させているという。エジプト学といえば、アスマン教授という方がいらっしやり、その著書をお読みになった方もいるだろう。そして美術史の本、本、本！イスラエルや南アフリカで出版された雑誌まである。また、日本語で書かれたゴッホの本のタイトルについて、司書の方からどう読めばいいのか聞かれたこともあった。わたしはキリスト教考古学・ビザンティン美術史、そして西洋美術史を専攻したが、ほしい文献がほとんど手に入った。

ゴシック時代のフランス大聖堂のステンドグラ

スについての研究は古いが、これに関し、どの本にも引用されている本を予約したら、それは貸し出しはできず館内での閲覧だけが可能であるとのこと（C. Cahier/ A. Martin, *Monographie de la Cathédrale de Bourges*, Paris, 1841/1844）。翌日行ってみたら、その大きさにびっくりした。一ページめくるのに机に座ったままでは無理で、立ち上がらないとできないくらいの大きさである。だからそこにある図版を眺めるのだって大変。大きな机の回りをぐるりと移動しつつ、本の上に身をのりだすようにして物語絵画を読み取った。ステンドグラスでは画面が細かく分かれているので、ぱっと見てわかるものではないからだ。でも、こんなに大きくて重い本って、実用的ではない。使う方の側に見れば、もうちょっとなんとかして頂ければ、なんて思ってしまうが、当時はカラー図版入りの本を出版すること自体、大変なご苦労があったのだろう。前々世紀のパリで出版された、そして多分そう多くはない発行部数のこんな大きな本がハイデルベルクですぐに見ることができること自体、ありがたーいことなのである。1910年代のフランスの本をベルリンの国立図書館で借りようとしたら、検索カードはあるけれど実物が見つからないと言われたことがある。司書の方のお話だと、ベルリンでは爆撃によって損失した図書が多いとのこと。それを聞き、ハイデルベルクの街が戦火にあわなかったことに、改めてそこで勉強する者として感謝申し上げる。

借り出せる本の数に制限はない。一人で100冊借りる学生がいたって全然平気である。学生たちも、この図書館の充実さを知っていると、図書館は宝庫だと言っている。必要な本を借りる中には、もちろん立派な教授もいる。

4週間借りているうちに誰かほかの人がその本

を予約したら返却する。が、それでもさらに使いたいときは2週間だけ他人に与えてまた手元に戻ってくる。あるとき、同じ本をめぐってこのように2週間ごと（あるいは4週間ごと）に借りたり返したりすることを2・3ヶ月ほど続けたことがあった。しかもある本を一冊使えば次に必要になる本もおのずと出てくるが、この本のここ読んだから、次にあの本も探している、といった具合に、もう一人の誰かと同じ経路をたどっていることまでわかってしまう。誰がわたしと同じようなテーマ（このときは中世写本挿絵について）に関わっているのか、と思っていたら、たまたまその本に予約用の紙片がはさまっていた。見たら美術史の教授の名前が印刷されてある。講義内容などからその教授の専門と近いことはわかっており、もちろんその講義も興味深いものであったが、彼女の名前を見たときは、うわあーやっぱり、と納得した。そういえば、館内でこの教授のゼミ生をよくみかけたけど、彼らたちが教授のためにせっせと本を借り出していたのだろう。

他の予約が入らないと4週間づつ2度延長できる。3度目は実物をもう1度カウンターで手続きしないといけないが、こうして借り出して、下宿の部屋には図書館の本で本棚1・2段分くらいはゆうに埋まるという生活を続けた。美術史では何と言っても図版が大事である。内容はどうであれ、いい図版を探し求めてページをめくった。注で「図版ハコレコレノ本ヲミヨ」などとあると、それを見たくてしょうがない（わたしは挿絵・写真が載っていない文字だけの本は読めなくなってしまった）。

ハイデルベルク大学図書館の有名な方はクライン氏である。長い留学生活ではいろんな方々に出会いお世話になったが、そのうちの大切なひとりである。彼は予約した本を書庫からカウンターに出してきて下さるのだが、本を探し出すことにかけてはスペシャリストである。氏がわたしの本を探してくれたおかげで、論文も書けたようなものだ。そして、ドイツ語で Sie から Du に替わって呼ばれることがどんなにうれしいものか、Sie はニュートラルで便利だけど表面的なのに対し、Du の間柄になると本当に気持ちを込めておしゃべり

できるようになるというその違いを体験して得られたのは、クライン氏による。コンピュータでかたっぱしから予約を入れて本を借り出ししていたが、そうしている間に、小さいニホンジンが大きな美術史の本を持ち出すから名前を覚えられてしまった。たどたどしいドイツ語しかしゃべれないのに、本は何語でもかまわずどーんと借りるから、おかしく思っていたかもしれない。

チュービンゲン大学の久保田氏がハイデルベルクに図書を探しに来たとき、カウンターでわたしのカードを出そうとしたら、クライン氏がもう棚から本を取り出してきてくれた。久保田氏が「あれ、顔覚えられてるの？」って聞いたけど、あれは留学して2年目の夏の終わりだったと思う。そのあと、こんなに重たい本全部持っていけるのかとか、きょうは雨が降ってるけど自転車で来たのかとか、カウンターで会話するようになり、いつの間にか Du で呼んでくれるようになったのである。これがとってもうれしかった。

クリスマスと新年の休暇中、2週間ほど図書館は閉館となるが、前から読みたいと予約していた貸し出し中の本がその休み中に切れることになっていて、休みに入る前には手にすることができると思っていた。毎日コンピュータで、きょうは来ているか見ていて、とうとう休暇の前日になった。その日は、やはり休暇中に使う本をどっと借り出すため、書庫の前のホールは学生で混雑している。大きな箱一杯、本を借りてゆく学生もいる。クリスマス直前で、世は異様なあわただしさである。カウンターの前も長い列。順番を待ち、目の前の大きな学生が消えてやっと係員までとりついたらそこにクライン氏。わたしを見つけて「来ると思ってたよー」とにやり。すでにわたしの行動は読まれていた。

渡辺先生と奈々ちゃんがハイデルベルクに来たとき、3人で図書館の前の道路を歩いていたら、クライン氏が通り過ぎたことがあった。先生いわく、「まー、あのおじさん、白髪が増えたわね」(sorry!)。先生が留学していた頃も、もちろん氏は働いていらした。「あのおじさんには毎日お世話になってマス」とわたし。日本人同士の間で、知る人ぞ知るハイデルベルクの街のクライン氏のこ

とおしゃべりできるのは楽しい。

本を読むところでは、好きな場所が二つあった。窓からあの古城を見上げることができる席と、ちょっと中世っぽい回廊の角度で中庭が見える席。本を読むのに疲れては、あのお城を眺めながらぼーっとしていた時間も多かった。教会の鐘の音が響いてくる。実は留学したての頃、ややこしい登録手続き — ハンコをもらうために学科ごとの事務室をたらい回しにされる — にくたびれ眠くて眠くて、午後の合間にちょっとのんびりしようか、と図書館に出かけた。ところが、うつぶせになって寝ている学生が一人もいない。これには驚いた。どこかの大学とはだいぶ事情が異なるようだ。あとでこのことを長くドイツで勉強している日本人に話したら、ドイツの方って誇り高いから、人前でよだれたらしながら眠りこけるなんてことはしないんじゃないの、という判断だった。その後、たまーに図書館で寝ている人物をみかけるとそれは我が東洋の人々である。まあそれはそれとして、館内でよく会う馴染みの顔もいくつかでき、その中にはアジアからいらしている方も多かったから、多種多様な人間がこの場所を利用していたことは明らかである。市民にももちろん広く開かれている。最近は一日この街を訪れた観光ふうの若者までが、パソコン室に寄って、ネットを利用している姿を見かける。

留学の間は、他の国の図書館を訪れる機会もあった。パリ国立図書館は、最近大変立派な建物が完成したが、古い写本類は別に保管されていて、そこに11世紀のビザンティン写本を見るため数日通ったことがあった。わたしが見たい写本は特別貸し出しで、閲覧する場所も決められている。周りにはやはり貴重本と格闘してらっしゃる方々がいた。鼻めがねをつけた上品な老婦人が、ものさしで羊皮紙のページを測っているのを見て、それからわたしも写本など見るときはメジャーを持っていくことにしている。挿絵については、できるだけ模写して実際に描いてくることを心がけた。ユトレヒトにはキリスト教図像学の目録があり、それを1週間、最後の日の閉館間際まで書き写し、ぎりぎり帰りの電車で飛び乗ったときは大きく安堵したのを覚えている。どこへ行っても、図書館特有の雰囲気は共通していた。

アメリカでは、24時間オープンしているとか。もっと充実しているのかもしれないが、とにかくこれら図書館のおかげで勉強できたことが、留学の大きな成果だと思っている。今、日本にいながら本を検索することができるが、ハイデルベルク大学のOPACを見ていて、あ、この本ほしい、と思っても、予約のキーを押すことができないのもどかしく思う。押せば数時間後カウンターに出してきてくれるはずだが、如何せん海の向こうである。